



協会では、1月の年明けから酵母の培養が最盛期となっています。酵母の種類もたくさん増えており、しかもアンブル（1本10ml）に加えて主に吟醸酒製造用の拡大培養酵母（1本500ml）もあり、奮闘しているところです。

さて、少子高齢化社会の到来と言われて久しいような気がしますが、平成27年（2015）の人口動態統計の年間推計（日本における日本人）が厚生労働省から1月1日に公表されました。これによると出生数は100万8000人、死亡数は130万2000人と推計されています。この差29万4000人が、自然減です。この1年で、約30万の都市が1つ日本から無くなったこととなります。物の消費は、おおまかには人口に比例すると考えられますから、酒類の消費も全体的には減少するものと思われます。人口減少は2005年頃から始まっており、出生数の増加も見込めないため、当分この傾向は続きそうです。

それでは、実際の飲まれ方の状況はどうでしょうか。平成26年「国民健康・栄養調査」の結果が厚生労働省から昨年の12月9日に発表されています。この調査の項目の1つである飲酒の状況によれば、飲酒習慣のある者の割合は、平成26年は男性34.6%、女性8.2%となっています。年次推移（20歳以上）を見ると、平成16年から男性は少し減っているように見えますが、女性はほんの少し増えているようにも見えます。この10年で、劇的に変化したという状況にはありません。

なお、飲酒習慣のある者とは、週に3日以上飲酒し、飲酒日1日あたり1合以上を飲酒すると回答した者の割合です。

飲酒習慣のある者の割合の年次推移

平成	男性 (%)	女性 (%)	平成	男性 (%)	女性 (%)
16	38.2	7.1	21	36.4	6.9
17	36.7	7.3	22	35.4	6.9
18	35.4	6.9	23	35.1	7.7
19	36.6	7.9	24	34.0	7.3
20	35.9	6.4	26	34.6	8.2

厚生労働省平成26年国民健康・栄養調査結果の概要より（24年は調査未実施）

一方で、データのある平成16年と24年の飲酒の頻度を男性の年齢階級別に比較すると30代、40代で毎日飲酒する人の割合が10%程度低くなっているのがわかります。これは適正飲酒の考え方の広まり、経済的な理由等が考えられますが、よくわかりません。詳しい分析をしていただきたいと思います。

飲酒の頻度－毎日飲んでいる人の割合（%）－（男性・年齢階級別）

平成	20 - 29歳	30 - 39歳	40 - 49歳	50 - 59歳	60 - 69歳	70歳以上
16	7.3	30.7	40.2	45.3	45.6	32.7
24	5.2	19.4	28.5	39.1	40.9	30.7

データは、厚生労働省の国民健康・栄養調査結果（16年は第77表、24年は第39表から転記）

ここ10年で飲酒習慣のある者の割合の変化は大きくはありませんでしたが、毎日飲む者の男性の割合は大きく変化しています。酒類の製造数量や消費数量の全体は、国税庁の統計を見れば明らかになりますが、酒類の飲まれ方や年齢に関する情報はつかめません。人口動態や飲酒状況などの調査結果を見ることで、市場全体の動きが少しは把握できるかもしれません。